様式第４号（第16条関係）

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	伊藤　真理奈

題　名

Postoperative Rehabilitation Program for Increasing Muscle Mass in Patients With Hip Fracture: A Retrospective Study

（ 和　訳 ）

股関節骨折患者の筋肉量増加のための術後リハビリテーションプログラム：後方視的研究

【背景】大腿骨近位部骨折患者は高齢であることが多く、手術後に日常生活動作能力や筋肉量が低下する症例が散見される。大腿骨近位部骨折術後にリハビリテーションを行った患者の日常生活動作能力や筋肉量の推移は過去にも報告されているが、いずれも術後数週間からの介入であり、術直後からの詳細なリハビリテーションプロトコールとその効果は不明であった。今回我々は、当院で大腿骨近位部骨折の手術を行なった患者に術翌日からリハビリテーション治療を行い、当院のリハビリテーションプログラムが患者の日常生活動作能力や筋肉量に与える効果を検討した。

【方法】2020年8月～12月に当院で手術加療を行った65歳以上の大腿骨近位部骨折患者を対象として、カルテ情報を参照し、後方視的に研究を行った。リハビリテーションプログラムは早期離床訓練、電気刺激併用筋力強化訓練法、関節可動域訓練、筋力増強訓練、歩行訓練、日常生活動作訓練を基本として、患者の状態や荷重制限に合わせて適宜変更した。アウトカムとして術後1週と6週時点の体重、全身・四肢の骨格筋量、脂肪量、利き手の握力、両側膝伸展筋力、日常生活動作能力を評価した。また、術前と術後6週時点の歩行能力も評価した。

【結果】採用基準を満たし、術後6週まで追跡可能であった17名を調査した。年齢の中央値は84歳（IQR72-90)であった。術後1週時点と6週時点を比較して、下肢骨格筋量が有意に増加し（median 4.8kg to 4.9kg, P＝0.045)、上肢骨格筋量（median 1.2kg to 1.1kg, P=0.0027）と体重（median 46.8kg to 45.5kg, P＝0.0039)は有意に減少した。全身骨格筋量と脂肪量は差がなかった。利き手の握力は維持された。健側・患側の膝伸展筋力は有意に増加していた（健側 median 10.7kgf to 13.7kgf, P=0.019、患側 median 5.5kgf to 9.5kgf, P＜0.001）。日常生活動作能力は全例で有意に改善していた。また、術前は7名が自立歩行可能であったが、術後6週時点では４名であった。さらに、受傷前と同等以上の歩行能力に回復していたのは全体の52.9%であった。

【結論】大腿骨近位部骨折の手術症例において、術翌日から当院のリハビリテーションプログラムを行うことによって、下肢骨格筋量が増加することを示した。

論文内容の要旨（1,000字程度）